

津山市史だより

2017.8
第9号



領家遺跡 南東方向からの遠景 (画面中央の丘陵の南東斜面)
道の駅久米の里の南方より臨む

津山市領家^{りょうけ}にある領家遺跡は、吉井川支流の久米川左岸の丘陵上に位置し、弥生時代中期から平安時代にかけての遺構・遺物が重層的に存在することが確認された遺跡です。中国縦貫自動車道の建設に先立って、昭和46年(1971)度に岡山県教育委員会によって発掘調査が行われました。

遺跡所在地の東には白鳳時代の寺院跡である久米廃寺跡(県指定史跡)が隣接し、さらにその東に久米郡衙跡^{ぐんが}と推定される宮尾遺跡もあり、調査当初からそれらの近隣遺跡との関連が注目されていました。

調査の結果、弥生時代後期には安定した生活が営まれていたことがうかがえ、古墳時代後期の鍛冶炉と思われる遺構も発見されるなど、久米郡衙・久米廃寺の創設以前から栄えた集落だったことが判明しました。しかも、その後の奈良〜平安時代の遺構では、礎石建物跡や緑釉陶器片が見られることから、久米郡衙や久米廃寺を成立させた有力者の集落と考えられています。

現在では、遺跡の上を東西に中国自動車道が走り、日々数多くの車両がせわしく通過しています。

(小島)

部会通信

◆ 自然風土・考古部会

(部会長…河本委員、副部会長…可児委員)

7月29日に通史編の部会を開催しました。執筆者からは、旧石器から縄文時代につながる年代観などどのように調整するか、鉄や須恵器生産は古墳時代から古代以降にもつながるもので、これをどのように記述するのかなど、他の部会との調整が必要な事項もあり、さらなる協議が必要です。

◆ 古代部会

(部会長…狩野委員、副部会長…今津委員)

5月13日に部会を開催し、掲載する資料の協議を行っています。8月には中世部会との合同部会を開催し、資料編の出版に向け調整を行っています。

◆ 中世部会

(部会長…三好委員、副部会長…久野委員)

資料編に向け順次資料調査を行っています。7月には、京都賀茂別雷神社で旧久米町の倭文庄関連の資料調査を行いました。また、5月と7月に部会を開き、資料編に掲載する資料について協議を行っています。

◆ 近世部会

(部会長…定兼委員、副部会長…在間委員)

3月の安井家文書の選別会での絞り込み結果を受け、今年度中に候補資料を撮影します。9月には部会を開き、資料編・通史編の章立てに関して協議する予定です。並行して、引き続き個人所蔵資料の調査を進めていきます。

◆ 近現代部会

(部会長…在間委員、副部会長…香山委員)

5月14日に部会を開催し、資料編の掲載資料絞り込み作業の方針や、借用予定の資料の調査方法などを話し合いました。7月22日・23日には市内の多胡本家酒造場から借用した資料の調査会を開催、近世・近現代の大量の資料の目録作成に着手しました。また、執筆者各自の個別調査も活発に行われております。

◆ 民俗部会

(部会長…前原委員、副部会長…安倉氏)

8月末に部会を開催し、秋祭りの調査計画などについて協議する予定です。民話編に関しては、調査録音を文字に起こした原稿のチェックや、分類などを進めていきます。



近現代部会：多胡酒造資料の調査会



中世部会：賀茂別雷神社での資料調査

吉岡銅山関連資料

東 万里子

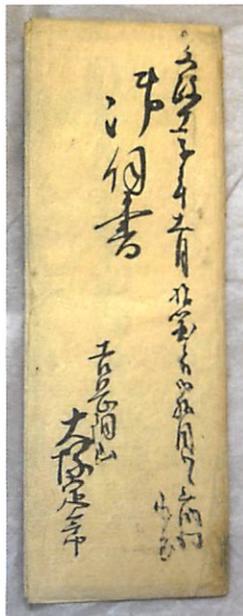
津山藩松平家文書には、さまざまな絵図類も含まれています。その中の一つに「備中国川上郡吹屋村吉岡銅山・同国同郡丸山村北方銅山見渡絵図」(写真①)があります。津山藩関係の文書の中に、なぜ備中にあった銅山の絵図があるのでしょうか。



写真①「備中国川上郡吹屋村吉岡銅山・同国同郡丸山村北方銅山見渡絵図」(部分)

た。ちょうどこの頃、吉岡銅山があった吹屋村(現・高梁市成羽町吹屋)は、久世代官所に赴任していた早川代官所管の村になりました。早川代官は、吉岡銅山の状況を把握、幕府に報告し、幕府は大塚家による銅山経営を再開させ、水抜き普請を開始しました(『成羽町史』、永山卯三郎著『早川代官』他)。この普請の途中、文化九年(一八一二)に、津山藩は備中国川上郡・阿賀郡の一部の幕府直轄領を預地として管理することになりました(尾島治「津山藩の預地」『博物館だより』No.24)。このとき吹屋村も津山藩の預地となったことから、吹屋村の吉岡銅山の絵図(写真①)が津山藩にのこされたと考えられます。

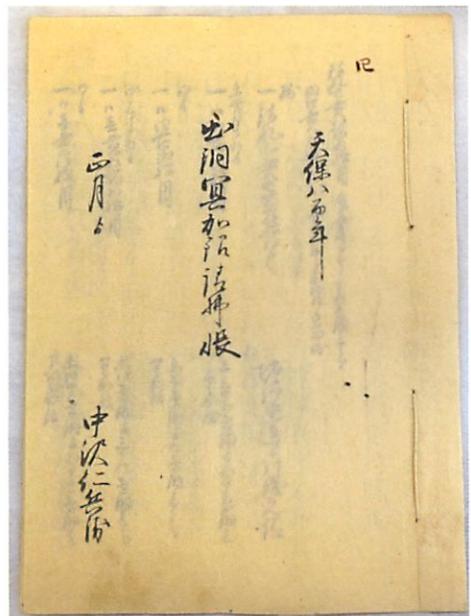
津山藩の預地になっても、水抜き普請は続きました。この普請は、運上銀と大塚家の銀を合わせて他へ貸し出し、その利銀によって進めたとされています。吹屋村が津山藩の預地になったとき、この金銭の管理は一旦生野代官所に移されますが、文政二年(一八一九)には津山藩の預所役所で取り扱うことになりました(永山卯三郎著『早川代官』)。津山藩の預所役所がどのように管理していたのか、現在のところ詳細はわかりません。



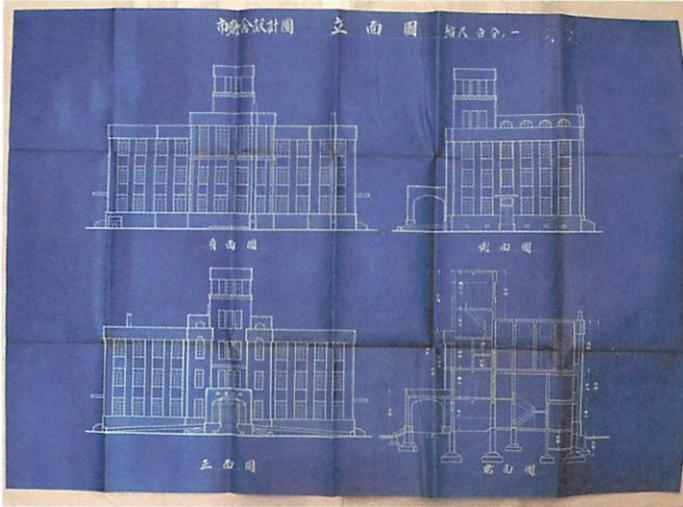
写真②「御伺書」

ただ、備中の預所の代官や奉行を歴任した津山藩士・中沢仁兵衛の残した資料の中に、吉岡銅山大塚定三郎が書いた伺書があり(写真②)、中沢夏樹氏蔵・当館寄託)、その一部を少し知る事ができます。

この伺書には、「御手当貸付利銀」について、渡してもらえないはずの利銀が不足していることを心配している旨、銅代前貸による拝借が認められるように交渉をしてくれた事を感謝している旨、これからは出銅量に応じた冥加銀を上納するので、御役所で便利の良いように取り計らってほしいと考えている旨などが記されています。(次頁へ続く)



写真③「出銅冥加銀請払帳」

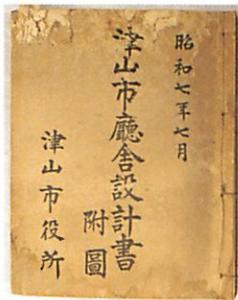


設計書類のうち青焼きの旧市庁舎立面図

資料紹介② 旧津山市庁舎設計書類

この資料は、今は郷土博物館として使われている旧津山市庁舎を建設する際の設計書類です。施設・設備・部屋などの数・寸法や各種工事の仕様を定めた全20丁の設計書と、配置図や平面・立面図をはじめとする青焼き図面全9枚から成ります。

市制施行から間もない昭和8年(1933)に竣工したこの庁舎は、昨年度の診断で耐震性に問題があると判明しました。耐震診断の際にこの設計書類も参照されましたが、これからの市史編さん事業においても、大いに参照し活用すべき大切な資料です。(小島)



旧市庁舎設計書類の表紙

大塚定三郎の冥加銀については、当時預所の代官であった津山藩士の堀江建造が「大塚定三郎出銀請払帳」(中沢夏樹氏蔵・当館寄託)を書き残しています。この帳面を引き継いで、天保八年(二八二七)、同じく預所代官となった中沢仁兵衛が「出銅冥加銀請払帳」(写真③、中沢夏樹氏蔵・当館寄託)を書いていきます。これらの帳面から、受け取った冥加銀から毎年宮地村へ手当を渡した

残りについて、貸付を行って運用をしている様子を窺い知ることができます。吉岡銅山と津山藩について、絵図や津山藩士の家にのこされた資料を紹介しましたが、わからない部分が多くあります。また、預地に関する金銭については銅山以外にも複数の種類があり、複雑な管理が必要だったと考えられます。これらについては今後の課題です。

『津山市史研究』第3号販売中

3月に発行した第3号の内容は下記のとおりです。創刊号・第2号とともに郷土博物館で販売しています(価格:各号とも1冊800円)。

- ・森俊弘「美作国守護代の歴史的展開」
- ・深見かつみ「津山地区における
ジャージー牛の消長」
- ・尾島治「津山の城下町における
作人の形成と町作」
- ・小島徹「美作国絵図の描画内容の変遷」

大塚利昭 元岡山市立オリエント美術館館長

※近現代各部会の執筆者として、新たに左の方が加わりましたので、ご紹介します。(敬称略)

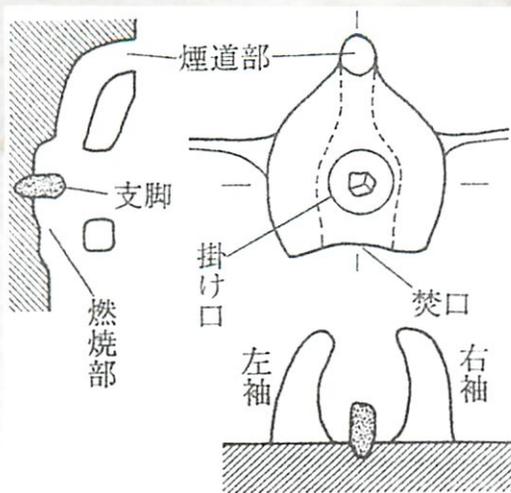
| 編さん事業の経過(平成29年4月) | |
|-------------------|---------------|
| 5月13日 | 第1回古代部会 |
| 5月14日 | 第1回近現代部会 |
| 5月20日 | 第1回中世部会 |
| 6月18日 | 美作学講座第1回 |
| 7月9日 | 京都上賀茂神社中世文書調査 |
| 7月22日 | 第2回中世部会 |
| 7月22日・23日 | 多胡酒造近現代資料調査 |
| 7月29日 | 考古通史編打合せ会 |

竈―カマド―雑感 ―領家遺跡の報告書から―

河本 清

津山市史考古部会では、市内の遺跡で発掘調査し、報告書を刊行したものを、旧石器時代から近世までを対象に、1遺跡を時代ごとにはぎ取るように遺構と遺物を抜き出して、その概要を図面付きでまとめ、通史だけでなく遺跡・遺物の理解の手ほどきとなるような、そんな内容の『考古資料編』の編集作業を進めています。

そうした中で気になった一つに領家遺跡の竈（以下カマドと書きます。美作では「クド」と言われてきました）があります。領家遺跡（注1）は津山市久米町（旧久米郡久米町）に所在した遺跡です。中国縦貫自動車道建設に伴い1971年から1972（昭和47）年にかけて岡山県教育委員



第1図 造り付け竈の各部名称
(出典文献1)

会によって発掘調査されました。現在、高速自動車道の高架下に保存されている、白鳳時代の寺院跡久米廃寺の西に隣接してありました。カマドは古墳時代になって出現した、新たな生活様式を示す遺構や遺物で、竈穴住居に造り付けられたものと、持ち運びができる移動式のものもあります。ここでは領家遺跡の竈穴住居に造り付けられたものを主としてみます。領家遺跡のカマドについては、報告書では縮尺500分1の「古墳時代の遺構」・同200分1の「遺構配置」、住居址一覧表、「写真図版」と数行の報文を参考にしました。それらによりますと古墳時代の住居は北から延びてきた丘陵先端部の斜面に所在しています。そのため竈穴住居は斜面下方が削平され、住居平面が完全に残っているものはほとんど見られません。加えて、他の住居と重複して切り合いをなすものも多くみられます。先の表によると20軒ばかりを調査しています。時期は5世紀代のもの1軒で、他は6世紀後半から7世紀前半に属するものとなっています。それらの中でカマドを有したものは、6世紀後半とされる竈穴住居24号と32号、それに7世紀前半とされる竈穴住居14号です。これらは平面方形をなす



第2図 竈穴住居 24号 竈（北西から）（出典文献5）

竈穴住居の一边の壁体にカマドを造り付けています。遺存状態の良い竈穴住居24号は、一边4.65×4.85mの方形で、主柱4本からなるイエです。カマドはその西南辺の壁体の中央付近を利用して築いています。カマドの上部は、後世の削平により壊れていますが、基礎部分をなす本体下部を残しています。報文では「砂を混入した粘土で土手状の高まりをハ字状築き、中に高さ5.8cmの土師器高杯をふせて支脚としていた」（注2）と記しています。報告書では写真のみで図面がないので、その規模の詳細はわかりませ

よる石組のカマドを設けた、7世紀代の竪穴住居を檢出するなど特徴ある集落を調査しています(注7)。しかし、7世紀後半から8世紀にかけて、住居形態は竪穴から平地式の掘立柱建物ほったてばしらたてものに変わっていきます。同時に造り付けカマドは竪穴住居とともに消えていきます。そして持ち運びのできる土師質の移動式カマドなどに移行するようになります。

ともあれ、今のところ美作地域への造り付けカマドの受け入れは県南より遅く、6世紀代になつてからであります。それは集落の中の世帯の一部であつても、甑と甕で米などを蒸す調理法も受容されたことは確かでしょう。こうした動きは、当時のムラ社会の生活様式の新たな変革として注目されましよう。

注

- 1 栗野克己ほか「領家遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告8』岡山県教育委員会 1975
- 2 注1より
- 3 行田裕美ほか「大開遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第51集』津山市教育委員会 1994
- 4 松本和男ほか「上相遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告3』岡山県教育委員会

1973

5 島崎東ほか「窪木薬師遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告86』岡山県教育委員会 1993

1993

6 亀山行雄ほか「津寺遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告104』岡山県教育委員会 1996

1996

亀山行雄氏は「結語 古墳時代の竪穴住居カマド」ではカマドの煙道をA類・B類に分類し、A類は住居内でおさまるもので、古墳時代でも比較的古い時期のものが多く、B類は住居外に延びる形式のもので、古墳時代中期後半以降から後期にかけての住居に多いとしている。

223～224頁。

これに従えば領家遺跡24号住居はA類か。32号はB類となる。

7 弘田和司ほか「久田原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告184』岡山県教育委員会 2004

図の出典文献

- 1 杉井健「竈の地域性とその背景」『考古学研究』第40巻 第1号 考古学研究会 1993 図 1 改変
- 2 注3文献 第50図・第51図 改変
- 3 浅倉秀昭ほか「高塚遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告150』岡山県教育委員会 2000 第1215図 改変
- 4 日下隆春「杉遺跡」『奥津町埋蔵文化財発掘調査報告4』岡山県奥津町教育委員会 2000 図50 改変
- 5 注1文献 図版53の1 改変

(市史編さん委員・考古編担当)

津山市教委（生涯学習課）・美作大学共催
美作学講座
—津山市史関連研究から—



第1回の会場の様子

第1回「源平内乱と美作国」 6月18日開催

前原茂雄氏（編さん委員／中世・民俗編担当）

毎年好評の「美作学講座」は、今年度も「津山市史関連研究から」と題して、4回開催します。

今年度初回の講師として、前原茂雄氏をお迎えしました。前原氏は、現在蒜山郷土博物館長として勤務され、津山市史では、編さん委員・民俗部会長・中世編執筆者として、調査・執筆を進めておられます。今回は、治承・寿永の内乱（いわゆる源平内乱）が長期間にわたって継続するなかで、美作国では何が生じていたのか、内乱の前後の状況も含めて、当時の資料をもとにご講演いただきました。

はじめに、治承・寿永の内乱は、日本が史上初めて経験した全国規模の国内戦争であり、全国各地に大きな影響を及ぼしたことを説明され、その上で、当時の美作国について本格的な分析がないことを指摘されました。

次に、内乱前の状況について、平安後期の平氏は、瀬戸内沿岸だけでなく、内陸部にも深く影響力を保持していたことなどを明らかにされました。

そして内乱の影響で、美作国各所で既得権が動揺・崩壊し、新しく勃興・進出した勢力の介入が開始する様子を、資料をもとに鮮やかに説明してくださいました。

内乱後は、平氏政権から交替した頼朝政権による関与が進む一方で、旧勢力を温存した支配も行っており、混乱が続いたことを指摘されました。

最後に、長期にわたる政治的混乱が、農民や村落生活に重大な影響を与え、救済・祈りの庶民化により新しい仏教勢力が生まれていったことも指摘され、しめくくられました。

◆ごあんない

○第3回 10月22日（日）午後1時30分～3時

講師…山下香織氏（津山市史近世編執筆者）

演題…「美作国風俗問状答」にみる

江戸時代の年中行事

○第4回 12月9日（土）午後1時30分～3時

講師…尾島治（津山市史編さん室室長）

演題…津山藩主松平家の明治維新

— 版籍奉還後の土地集積をめぐって —

津山市史だより
第9号

発行：平成29年8月1日

編集：津山市史編さん室

〒708-0022 岡山県津山市山下92 津山郷土博物館内

TEL：0868-22-5820

FAX：0868-23-9874

Eメール：tsu-haku@tvvt.ne.jp